

【特集：LD-SKAIPクラウドデータの整理、分析】2022年度公開講演録

## 「学習支援の地図」と「支援教材バンク」

小 貫 悟

### 支援教材バンク

「学習支援の地図」と「支援教材バンク」という題目でお話させていただきます。LDやLD周辺の子に対する「支援教材」をお見せしながら、その教材の意味と妥当性を説明させていただきます。

「支援教材バンク」とは、明星大学で研究的に蓄積してきましたものを、どなたでも無料でダウンロード可能にしたものです。「明星大学 支援教材バンク」と検索していただければご覧いただけます。

まず、このページにある説明箇所に10項目程度の簡単な「チェックリスト」があります。「支援教材バンク」内の各教材は、このチェックリストの項目と対応しています。例えば「書けないひらがながある」にチェックが入った場合にはそこをクリックしていただきます。すると教材一覧が出てくるわけです。教材バンクには約500種類の教材があります。チェックリストを活用してお子さんの状態に合わせて上手に教材を活用していただきたいです。

《スライド1 読みのチェックリスト》

《スライド2 書きのチェックリスト》

### 学習支援の地図

この支援教材バンクを支える理論を図示したの

が「学習支援の地図」です。「読み」と「書き」のそれぞれにこの「地図」があります。これは、この子のつまずきは「どこ」にあって、どういう「方向」に進んでいったらよいかを把握するための理屈になります。つまり、バンク内の教材の体系は、この地図に関連付けられているのです。「支援教材バンク」には約500個の教材がありますが、実際には、あらゆるつまずきに対応する教材を作ろうとすると、それでもとても足りないのです。学習困難にも多様性があるわけです。「学習支援の地図」は、「バンク」内の教材を参考にして、どうしてそうした教材になったかを理解し、目の前の子どもに合わせて、よりフィットした教材を、皆さんご自身で作れるようにするためのものもあるのです。

### 読み書き支援の世界地図

《スライド3 読み書きの支援地図》

まず、読み書き支援の「世界地図」と私が呼ぶものからお話しさせていただきます。この地図は、読み書きの課題のある子達をどんなふう理解していくかを俯瞰して見て行くものになります。

真ん中の層に三角形の図が並んでいます。それぞれ「聞く」「話す」「読む」「書く」の階層モデルとその関連を示しています。この4領域が関連し合って、その子の言語能力の状態が生まれます。アメリカでは発達臨床における「言語」をSpeech

# 読みのつまずきチェックリスト

スライド1

20220428\_8...19f56...8f3...9b10 x +

kenkyu.hino.meisei-u.ac.jp/mission/wp-content/uploads/sites/19/2022/04/checklist.pdf

20220428\_8...76f58...8f3...9b10...xlsx 1 / 1 100%

児童No.: 年 組 ( 番 )

明星大学 発達支援研究センター

### 読みのチェックリスト

階層	質問項目	チェック欄
文字	1 読めないひらがながある。	ほとんどない よくある
	2 濁音(例:「が」「だ」等)、半濁音(例:「び」「び」等)が読めないことがある。	ほとんどない よくある
文字・音	3 読めないカタカナがある。	ほとんどない よくある
	4 習った漢字でも読めないものが多い。	ほとんどない よくある
語	5 単語の読みがたが正しい。	ほとんどない よくある
	6 特殊音節(拗音、長音、促音等)を読むことが苦手。 (例:きゆうしよー「きょうしよく」、しゆっぱう「しゅっぱつ」と読む等)	ほとんどない よくある
	7 本を読むと、知らない言葉が多い。	ほとんどない よくある
文	8 文をスムーズに音読することが苦手。	ほとんどない よくある
	9 助詞や文末を違った読み方にする。 (例:先生が教える→「先生に教える」、立っていた→「立つ」と読む等)	ほとんどない よくある
	10 一文の内容が理解できない。	ほとんどない よくある
文章	11 物語を自分で読んで、ストーリーを理解することができない。	ほとんどない よくある

### 書きのチェックリスト

階層	質問項目	チェック欄
文字	1 形の整った文字を書くことが難しい。	ほとんどない よくある
	2 書けないひらがながある。	ほとんどない よくある
文字・音	3 書けないカタカナがある。	ほとんどない よくある
	4 習った漢字がなかなか書けるようにならない。	ほとんどない よくある
語	5 単語を書くときに、文字が抜けたり、文字の順序が違ったりする。 (例:たなばたー「たばなま、かたたきー「かたたきと書く等)	ほとんどない よくある
	6 特殊音節(拗音、長音、促音等)のあることを書くことが苦手。 (例:しよがっこう「しよがっこう」、しよがっこう「しよがっこう」等)	ほとんどない よくある
文	7 文を書くときに、必要な情報が欠ける。 (例:主題がわからない、場所や時間がわからない等)	ほとんどない よくある
	8 助詞の使い方に間違いが多い。 (例:プレゼントをもらう→「プレゼントにもらう」と書く等)	ほとんどない よくある
	9 文の内容に誤差が起きやすい。 (例:文の書き出しと終わりがつながっていない等)	ほとんどない よくある
文章	10 文の筋道を間違えやすい。(例:行きましたー「行きます」と書く等)	ほとんどない よくある
	11 短い作文しか書けない。	ほとんどない よくある
	12 作文を書くとき、起こった事実を羅列するだけになりがち。 13 筋の整理が通らない。 (例:時系列がバラバラになる、書こうと思ったことと違った内容になる等)	ほとんどない よくある

33°C 6月の5時

15:47 2022/08/16

# 書きのつまずきチェックリスト

スライド2

20220428\_8...19f56...8f3...9b10 x +

kenkyu.hino.meisei-u.ac.jp/mission/wp-content/uploads/sites/19/2022/04/checklist.pdf

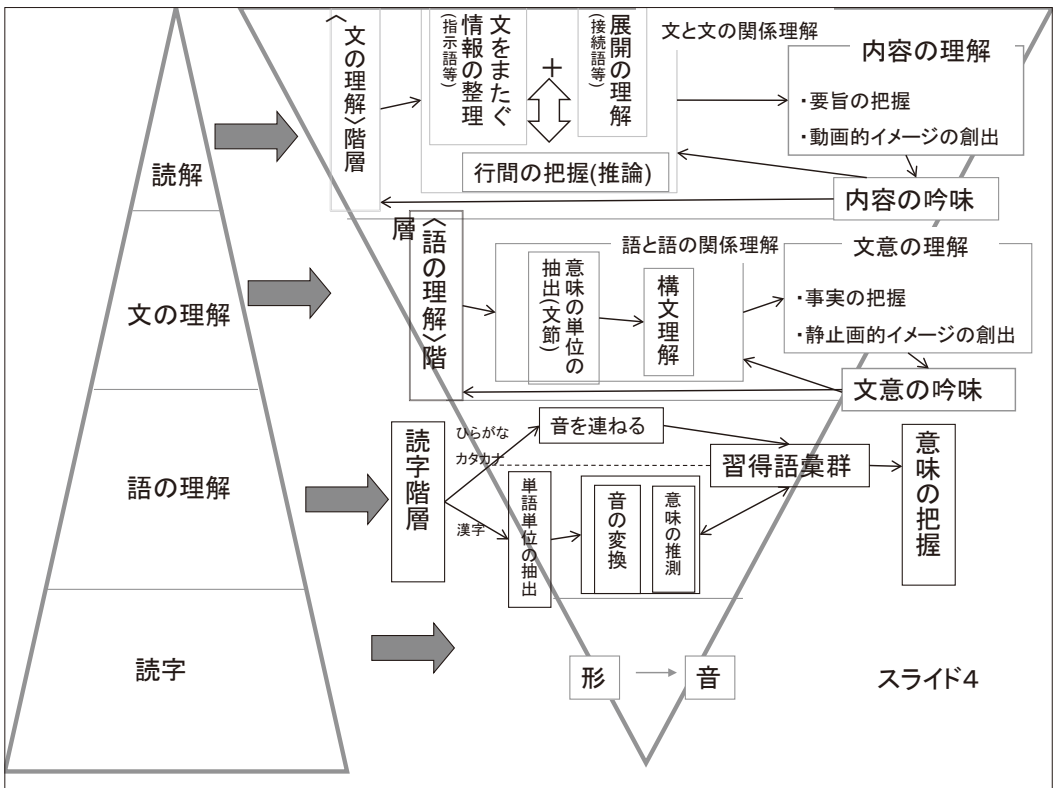
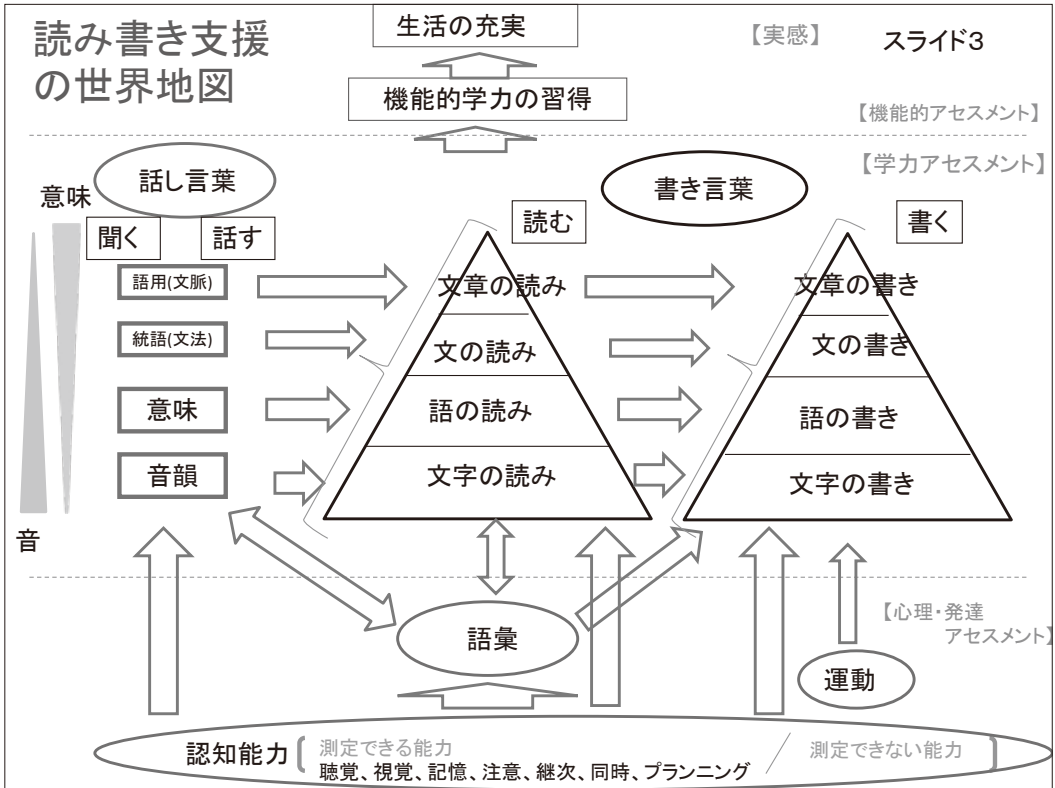
20220428\_8...76f58...8f3...9b10...xlsx 1 / 1 100%

### 書きのチェックリスト

階層	質問項目	チェック欄
文字	1 形の整った文字を書くことが難しい。	ほとんどない よくある
	2 書けないひらがながある。	ほとんどない よくある
文字・音	3 書けないカタカナがある。	ほとんどない よくある
	4 習った漢字がなかなか書けるようにならない。	ほとんどない よくある
語	5 単語を書くときに、文字が抜けたり、文字の順序が違ったりする。 (例:たなばたー「たばなま、かたたきー「かたたきと書く等)	ほとんどない よくある
	6 特殊音節(拗音、長音、促音等)のあることを書くことが苦手。 (例:しよがっこう「しよがっこう」、しよがっこう「しよがっこう」等)	ほとんどない よくある
文	7 文を書くときに、必要な情報が欠ける。 (例:主題がわからない、場所や時間がわからない等)	ほとんどない よくある
	8 助詞の使い方に間違いが多い。 (例:プレゼントをもらう→「プレゼントにもらう」と書く等)	ほとんどない よくある
	9 文の内容に誤差が起きやすい。 (例:文の書き出しと終わりがつながっていない等)	ほとんどない よくある
文章	10 文の筋道を間違えやすい。(例:行きましたー「行きます」と書く等)	ほとんどない よくある
	11 短い作文しか書けない。	ほとんどない よくある
	12 作文を書くとき、起こった事実を羅列するだけになりがち。 13 筋の整理が通らない。 (例:時系列がバラバラになる、書こうと思ったことと違った内容になる等)	ほとんどない よくある

33°C 6月の5時

15:47 2022/08/16



and language」と呼び、口頭言語と視覚言語をセットにします。我々も、「読み」「書き」の支援を考える際には、「聞く」「話す」の状態を観る視点が重要になります。

まずは「読み」の三角形を見てください。「読む」と一言で言っても「文字」「単語」「文」「文章」を読むことはそれぞれ違った能力を必要とします。普通は、文字が読めなければ、単語も読めないだろう、単語が読めないと、文が読めないだろうと思ってしまうのですが、大人になったディスレクシアの方々は、その文章の中に何が書いてあるかをさっと黙読できる。しかし、一つ一つの単語を音読することが求められるとつまずきが目立つ方もいます。つまり「読み」の中でも「文字」「単語」「文」「文章」がきれいなピラミッド（階層）構造ではないんですね。積みあがり方が逆三角形のような状態だったり、でこぼこしていたりする。これが、それぞれの子の読みのつまずき方の特徴として出てくるわけです。

そして、なぜ、そうなのだろうかという話になってくると、さらに専門的な見方も必要になってくるのです。つまり「世界地図」の下部を検索することになります。ここは「目には見えない領域」です。「見えない」ので、専門的なツールを使うしかありません。例えば、WISCを取ってみようというように、認知能力検査などのアセスメントを行うことになります。また、習得している語彙の数なども見えない部分で「読み」「書き」を支える力になります。語彙力は「聞く」「話す」にももちろん影響します。学齢期になってくると、読書を通じて語彙を増やします。語彙が増えるから、さらに読む力もつきます。しかし、元々、「読み」が苦手な子は、その良循環に乗れないため、現状、どのくらい語彙力があるのか、増やすための学習状況にあるのかなどのチェックも必要になります。さらに「手先の運動、不器用さ」などは「書き」に影響します。図の真ん中付近の見えているつまずきと、下部の見えない背景などの関連を押さえつつ、その子の「つまずきの世界」を俯瞰するわけです。そして、どこに向かっていくべきかを考

えていきます。例えば、学校の書き取りテストで80点以上取ることだけが目的ではなくて、生活に機能していく学力を手に入れて「人生の充実」に寄与していくことに、支援はつなげていく視点も忘れないようにしたいです。それが図の上部の意図です。

## 読み支援の地図

「読み支援の地図」を見ていきましょう。「世界地図」で示した階層構造の三角形モデルの「読み」の部分抽出して、さらにその階層の内部構造を示しています。その内部構造として、指導クラスターと呼んでいる四角形の指導カテゴリーがあります。「支援地図」という意味では、それぞれの四角形をそれぞれの「階層」内の「番地」みたいなものだと考えてください。これは、それぞれの階層の中でも、どのような支援をするかの指導ポイントを示したものです。一つ一つの番地が、階層の中で、地図全体の中で、相互にどう関係しているのかを考えながら、支援プランを立てるわけです。

《スライド4 読み支援の地図》

## 「読み支援の地図」と「チェックリスト」

ここで先ほど触れた「つまずきチェックリスト」を見ていただきたいと思います。「読み」に関しては11項目があります。チェックリスト項目は支援の地図の「階層」と「番地」に関連しています。「この階層内のこの番地を指導するには、どんな教材があるかな？」と思ったら「支援教材」の「練習一覧」をクリックしていただくと、その部分の「教材リスト」が出てくるわけです。さらに、そのリストから進むと、「教材の形式」のアイデアが各種出てきます。こうした形式にこだわるのは、読み書きが苦手な子が「楽しく」学習できるように、できるだけ、遊び、ゲームの雰囲気を持った教材にしてあるからです。

ケース1

**ケース1** スライド6

小学校1年生です。  
 入学前から、どうしても「ひらがな」を区別して読むことができませんでした。  
 「あ」「お」や「た」「に」が同じ音になったりしました。入学してからカタカナの習得も同じような感じであまりきませんでした。  
 絵を描くことや、パズルなどは好きで、楽しくできます。小さなころからアンパンマンが大好きです。

《スライド5 文字の読みケース》

この事例をチェックリストで見るとどうでしょう？ そうですね。「文字」の読みの問題がメインと考えてよいですね。つまり支援地図では「文字階層」ののところを見るわけです。地図の「文字の読み階層」にある指導構造、つまり「番地」を見てください。そこに〈「形」→「音」〉と番地とその関係が描かれています。これは、文字を読むという作業は「形を捉え、音にする」作業だということを示しています。多くの子は、この最初の段階をすんなり超えちゃうわけです。しかし、LDの子は、この流れのどこかでつまづきます。だから、特別な練習メニューを考えてあげたいわけで



す。そこで「支援教材バンク」を見ていくことになります。まずは「練習一覧」から、もっともフィットした物を探し、さらに「教材形式」のサンプルからその子の興味に合いそうなものを見つけます。例えば、こんなサンプルになります。

《スライド6, 7 文字指導の教材スライド》

## ケース2

**ケース2** スライド8

小学校2年生です。

どうしても「しゃ、しゅ、しょ」を区別して読むことができません。さらに「おじさん」を「おじいさん」と読んでしまったりもします。

音読も一文字一文字を読んでいくので、ちゃんと内容を理解することが難しいようです。

読み聞かせをしてもらったりするのは好きなので、寝る前に自分から本を持ってきてお母さんに読んでもらっています。

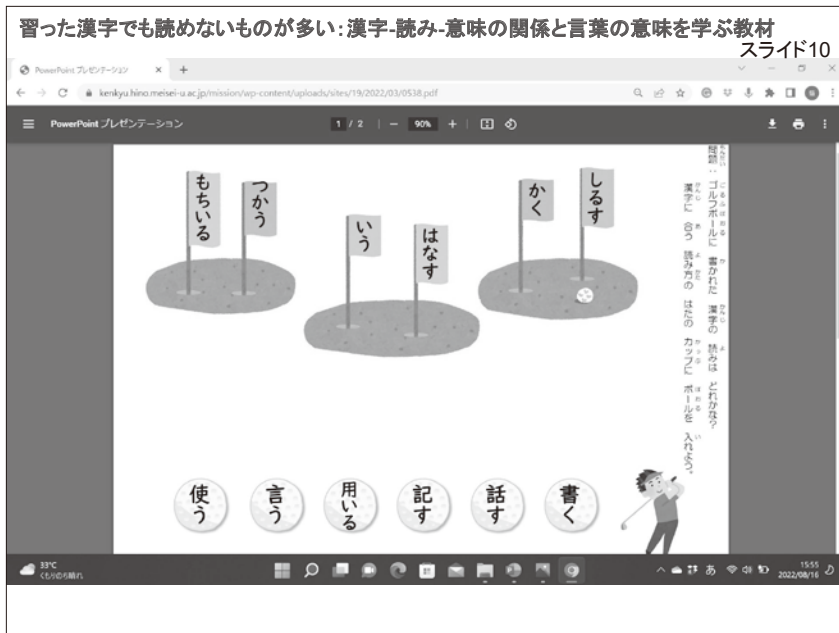
《スライド8 文字の読みケース》

単語の読み階層に課題がある子ですね。単語の読みの指導構造には「ひらがな」の経路と「漢字」の経路があり、その途中に指導カテゴリー、つま

り「番地」があります。ひらがな経路では「み」と「か」と「ん」が一文字一文字読めれば「みかん」とつなげ、それを自分の中の語彙の辞書である「心的辞書」にアクセスするわけです。つまり、その子の中にある自分の習得している言葉のタンクの中に「みかん」という言葉があれば、「あのオレンジ色でおいしい果物」の映像をその子が頭の中で思い浮かべることができるわけです。これが、ひらがな単語を読むプロセスです。一方、漢字によってできている単語になると別の経路になります。漢字は、熟語として使われるか、送り仮名があることがほとんどです。まずは、漢字でできた語句を一つの「単語のかたまり」として見えるかが大切になります。そして、この漢字単語を読む段階で「音」についての課題も出てきます。例えば、この「階層」という単語も「海草」も「快走」と同音異義語があるわけで、そのために「自分辞書」にアクセスする際に間違いが起きます。各番地の意味はそうしたことを示しています。

《スライド9,10 単語の読みの教材スライド》

**特殊音節を読むことが苦手:小さい「や行/っ」や伸ばす音の単語の読み教材** スライド9



### ケース3

**ケース3** スライド11

小学校4年生です。  
真面目な性格なので、一生懸命に勉強に取り組めます。漢字なども積極的に勉強したので、たくさんの言葉も知っています。

しかし、文を読んで、「誰が」「どのように」「どうした」ということを間違っ読んでしまっ、一体何が書かれているのかわからなくなってしまうようです。そのため、算数の文章題もどういことが書かれているのかわからず書いてある数字をでたらめに式にして計算してしまっ。読める漢字はたくさんあるので、それを活かせないのが残念です。

#### 《スライド11 文の読みのケース》

この子は、読める漢字はたくさんあるので、それを活かせないのが残念ですね。支援地図でも下部にある階層には課題が少ないようですね。つまり、読める漢字(単語)はたくさんあるのです。ところが、その一つ一つの単語の関係の理解が弱い。これは「文の読み」のつまずきですね。

単語と単語の関係を作っているのは、日本語に関しては「助詞」の機能になります。単語と助詞を一つのかたまりとするのが「文節」ですね。この文節を連ねていくことで一つの文が出来上がっています。それらを読み、その文が「伝えたいイ

メージ」が見えてくると「文が読めた」ということになるわけです。このことを「静止画イメージ」を伝達する役割と考えてみます。これが重なって文章になると「動画的イメージ」になるのはアニメーションのメカニズムと同じですね。そうやって考えてみると「文」と「文章」の違いが少し見えてきます。また、時々、そうした頭の中の「イメージ」がおかしな映像になることもありますね。これは「読み間違い」が起きた可能性があるということです。その時に「吟味」が必要になります。「あれ、どこかで間違えたぞ」とその部分を見直しに行くプロセスが必要です。こうしたことも学習していく機会を持つことが支援としても重要になります。

#### 《スライド12,13,14 文の読み階層の教材》

助詞や文末を違った読み方にする:「～を、～が」等がうまく使えない子向けの教材 **スライド12**

助詞や文末を違った読み方にする:「～を、～が」等がうまく使えない子向けの教材 **スライド13**

文をスムーズに音読することが苦手:文をうまく区切れない子のための学習教材 **スライド14**



ケース4

ケース4

スライド15

小学校5年生です。とてもおしゃべりで趣味のゲームのことならずっと話をされています。

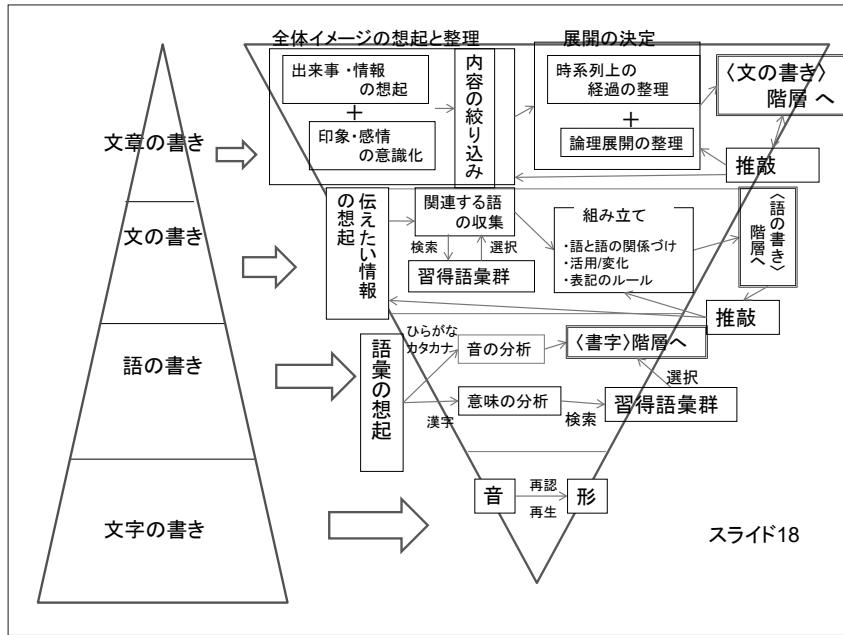
しかし、読書を楽しむことが出来ず、今まで、一冊の本を自分で読んだことがありません。読んでいてもストーリーが追えず、途中で投げ出してしまいます。教科書の物語などは何度も読んでいううちにだんだん面白さがわかってきます。特に、最初何があって、そのあとにどう展開して、結果的にこうなったというようなことを自分で把握することができないので、読んでいる途中で「なんでこうなったの？」と何度も確認してきます

《スライド15 文章の読みケース》

ここには、文章の読み階層のエラーが記述されていますね。この階層で大切なのは、文と文をつ

ながことになります。文と文をつなぐのは接続語の働きですね。こうした「文と文のつながり」をよく考えていく学習プロセスが必要になります。しかし、多くの子が苦戦するのは、文と文の間にある「行間を読む」必要がある文章になります。高学年になると、そうした文章と出会う機会も増えてきます。前の階層での「文」の読みがしっかりしている必要もありますし、慣れが必要になります。そしてできた動画的イメージが、なんだかおかしい映像になっちゃったときの「吟味」で何か読み違っている場所にちゃんと戻れるかどうかのトレーニングの大切さは「文」のときと同様です。つまり、「文」と「文章」のトレーニングは、かなり近い関係にあります。教材は長文を読むより3文程度の文章から学ぶ方が効率はよくなります。





以上の視点で「支援教材バンク」の教材が置いてあります。

《スライド16,17 文章の読み教材》

### 書きの学習支援の地図

《スライド18 書きの支援地図》

それでは、ここからは、さらに同様に「書きの支援地図」と「支援教材」との関連を見ていきたいと思います。書きの地図も読みの地図と見方や使い方は同じです。

#### ケース1

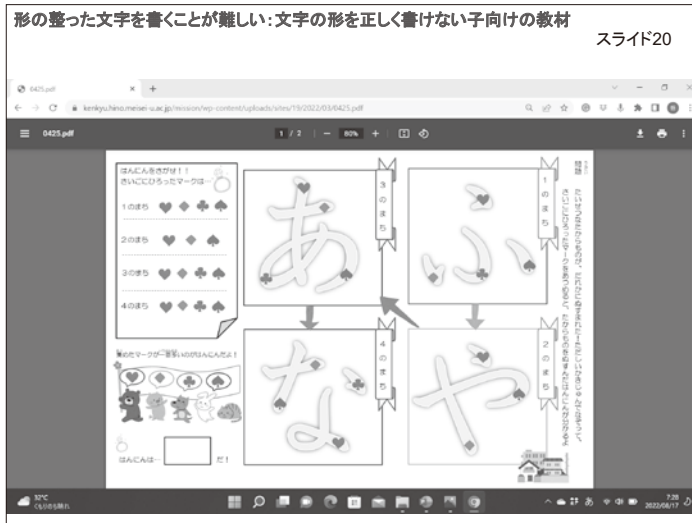
スライド19

### ケース1

小学校1年生です。  
 ひらがなを完全に覚えて書くことができません。  
 特に「ぬ」と「ね」が区別して書けません。  
 また、話し言葉の中で発音に幼児音が残っているため、「しお」を「ちお」と書くなどのミスもあります。  
 カタカナ言葉はほとんど、ひらがなを混ぜながら書く状態です。

《スライド19 文字の書きケース》

支援の地図でも「文字の書き」が課題になっているケースですね。読みのときとは逆で、階層内の構造、つまり番地間の関係は「音」を「形」にするということになります。ここでさらに「再生」と「再認」という二つのキーワードが出てきます。これは、書くにあたっての認知的な作業の仕方を示すものです。「再生」は、これまでの「紙」に「鉛筆」で書くために必要な認知機能になります。つまり、記憶の中からその文字を思い出し、それを紙上に「再生」する行為です。しかし、今や「書く」という行為は、様々なツールがあります。例えば、ワープロソフトを使って「書く」のは、紙と鉛筆とは違った認知作業となります。書きたい「音」をキーボードで入力すると、いくつか候補が出てきて、その中からこれって選ぶ作業を、記憶している文字を「再認」という言い方になります。そうになると、文字を書く学習支援も、これまで正攻法とされていた「再生」作業を中心とする「書き」の育て方をするのか、将来、デバイスなどを使っていくためのメインとなる「再認」を使っての「書き」を育てるのかというような大きな方向性の検討も必要になるわけです。それによっては、選択する



指導や教材内容も変わってきます。例えば、「再生」には「筆順」の理解が最重要になります。しかし、筆順がどうしても入らない子には別の作戦が必要になります。教材の選択にあたっては、色々と考えていく必要がありますね。

《スライド20,21 文字の書き教材》

## ケース2

スライド22

ケース2

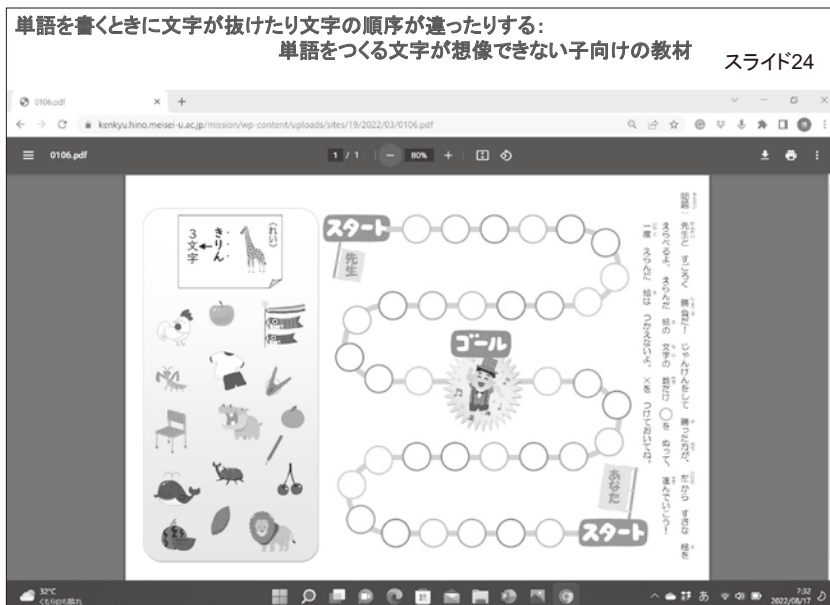
「しょう」や「ちょう」などの特殊音節が苦手です。「や」「ゆ」「よ」の正しい選択ができません。つまる音である「っ」が抜けることがあります。おかあさんといっしょに「し+よ」は「しよ」など、「音の足し算」などで学習していますが、なかなか理解できないようです。

《スライド22 単語の書きケース》

単語の書きについて課題のある子ですね。この階層では、読み同様に「ひらがな」なのか「漢字」の単語なのかで大きく経路が違ってきます。書きたい語彙があったときに、ひらがな単語でしたら、単純にその単語を構成する一音一音をつなげていく作業になります。こうして説明すると単純に思えます。実際には「音をつなげていく」作業で課題となりやすいのは「特殊音節」になります。拗音や促音など、音とその表記の関連でつまずく子

は少なくありません。この部分では教材による工夫が必要になりますので、支援教材のサンプルを参考にして、その子その子に応じた教材を作っていただきたいと思います。また、漢字単語でしたら、その意味を考えて、まず適切に「自分辞書」を検索して、「再生」か「再認」をしていくことになります。

《スライド23,24,25 単語の読み教材》





### ケース 3

スライド26

## ケース3

文がうまく作れません  
 「ぼくはきのうに友だちがあそびにきたので、公園でボールであそびました」などの作文を書きます。

話すときにもゆっくりと話します。言いたいことを頭の中で時間をかけて考えてながら話しているようです。

もう一度、見直すように促しますが、自分の間違いを見つけることも苦手です。

#### 《スライド26 文の読みケース》

この子は、文階層での指導を良く考える必要がありますね。この階層での流れは、伝えたい内容があったときに、それに関連する言葉を見つけてくることから始まります。わかりやすくするために、皆さんが外国語で何かを表現することを比喩にすると「ああ、こういうこと言いたい」って思ったときに「自分英語辞書」にある単語をバァーと想起しますよね。例えば、「景色がきれいだなあ」って表現したいと思うと、beautiful、good、

amazing、nice、wonderful・・・とか、とにかく知っている単語を並べたてる人がいますよね。しかし、それで伝わるのはその思いの一部だけ。きちんとSVOCで文として組み立てないと言いたいことはきちんと伝わりません。これは日本語でも同じことで、想起する単語を「集めて」「組み立てる」ことが大切なのです。これが文を書くことの実態ですね。文を組み立てるには、具体的には「助詞」や「活用」の理解が必要になります。こうしたことを中心に支援教材を考えていきます。

そして、文の読みや文章の読みでも強調したように、間違った文に違和感を持てることが大切になります。自分の文を読んでみて「あれっ」と感じ、「ここがおかしい」と特定し、正しく直せることを書きの指導では「推敲」と言います。実は「推敲」は、私たちも毎日やっていますよね。スマホで文章を書いたときに、読み返すと「て、に、を、は」がおかしいなんてことは、しょっちゅうあります。だから、そこを育てる視点を持った、そんな教材も考えてあげるとよいのです。

#### 《スライド27,28,29,30 文の書き教材》

文を書くときに必要な情報が欠ける:文を正しく組み立てるのが苦手な子向けの教材

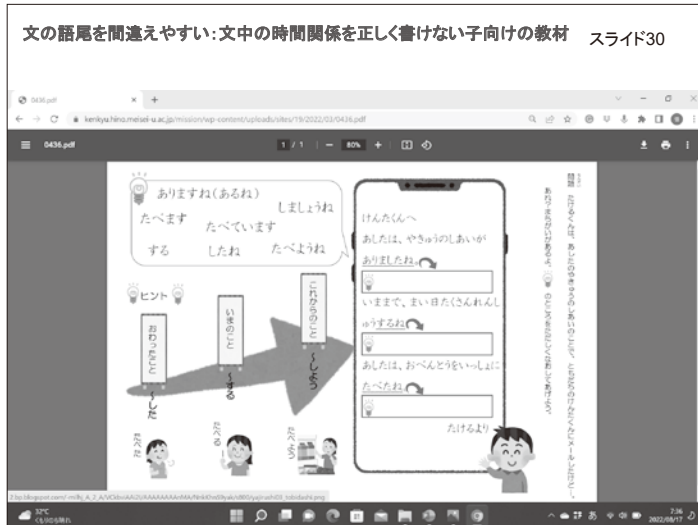
スライド27

文を書くときに必要な情報が欠ける:文の誤りを直す力をつけるための練習教材

スライド28

文の内容に混乱が起きやすい:文章を正しく直す力をつけるための練習教材

スライド29



#### ケース4

スライド31

### ケース4

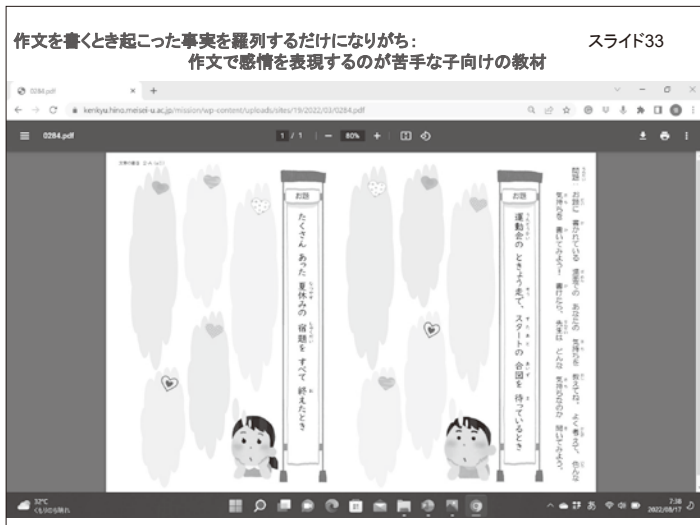
作文を書くときにうまくテーマが決められません。一日にあったことをとにかく書くことはできますが、結局、何を言いたのかわからなくなってしまうです。

時々、話の内容が時系列でなく、前後してしまったりします。全体の内容をイメージしてから作文を書くということはまだ無理なようです。

《スライド31 文章の書きケース》

いよいよ、文章の書きの指導ですね。地図では、まず「出来事を想起する」ことから始まるのは文の階層と同じです。しかし、文章に関しては、想起した出来事をそのまま書いていくと事実を羅列しただけのダラダラとした文章になってしまいがちです。「朝起きて歯を磨き、学校の支度をし、学校に行きました。学校に着いたら・・・」という類の作文ですね。書こうとしていることの「内容を絞りこむ」ためには、その想起した出来事についての自分の感情を意識化する必要があるのです。強く感じたことや、印象に残ったことが「一番伝えたいこと」になるからです。つま





り、作文の中などで「気持ち」や「感情」を表現できるように練習することはとても大切なことです。そして、さらに、書きたいことを論理立て、時系列に書くことも練習が必要です。ここを育てるにはあせらずに時間をかける必要もあります。そして、もちろん、「見直し」をして「おかしいところ」を直す力は、この階層でも求められます。

《スライド32,33,34 文章の書き教材》

## まとめ

いかがでしたでしょうか？「支援地図」と「支援教材」の関係が少し見えたでしょうか？ここで説明したことを前提にして、どんどん我々の「支援教材バンク」を使っていただきたいのです。ただ、説明の中でも触れましたが、ここにある支援教材だけでは、すべてのつまずきには対応できません。地図を使って、それぞれの現地（実態）に応じて、上手にその方向を決めて、焦らずに、歩みを進めていただきたいと思います。